

## トロロープの『自伝』を読む

● 香 山 はるの

—おそらく成功した作家の経歴くらい魅力のあるものはないだろう— (トロロープ、『自伝』11章)

アンソニー・トロロープは小説、短編など非常にたくさんの作品を残したことで知られるが、彼の死後、1883年に出版された『自伝』も、批評家を含め、これまで多くの人々に広く読まれてきた。当時のトロロープの愛読者が、ほとんど自伝的な小説を残さなかったこの作家の人生に関心を抱いたことは想像に難くない。そして、『自伝』が人々の注目を集めたのは、その衝撃的な内容に拠るところも大きい。たとえばこの本の中で、トロロープが、インスピレーションが湧き上がるのを待って一気呵成に創作をするような小説家を否定し、自らをコツコツと勤勉に仕事をする「靴職人」にたとえていること、自分が得た収入を作品ごとに事細かに記録していることなど、作家という仕事を「ビジネス」として捉えている姿勢が反響を呼んだ<sup>1</sup>。さらに、『自伝』の中で、トロロープが自分の私生活のことをあまり語っていないということも特徴的である。こうした点から、批評家、ジョン・ホールが論じているように、この本が必ずしもトロロープの名声を失墜させたとはまでは言えないとしても<sup>2</sup>、私たち今日の読者にとっても、非常にユニークな「自伝」であると思われる。はたしてトロロープはどのような意図を持って『自伝』を著したのか。ヒュー・ウォルポールをはじめとする19～20世紀の文人から現代の批評家まで多くの人が『自伝』について論じてきたように、トロロープの人生や作品を理解する上で欠かせない本であることは間違いない<sup>3</sup>。以下、『自伝』が書かれた背景やその内容について考察し、トロロープの意図や考えをあらためて探りたい。

トロロープは生前にこの『自伝』を出版する意向はなかった。R.C.テリーによれば、彼は1875年の10月に、ニューサウスウェールズに暮らす次男フレデリックを訪問した後、イギリスに向かう船の中で執筆を開始し、翌年1月に完成した。また、4月には長男ヘンリーに宛てた手紙をしたため、この回想録を彼に遺すこと、自分の死後出版してほしいこと、内容の削除は彼の裁量に任せるが、加筆されることは望まないこと、何か書きたいことがあれば、序文等の形で書いてほしいことなどを記している (*Oxford Reader's Companion to Trollope*, 23)。トロロープは『自伝』を書いた7年後、1882年に亡くなった。オックスフォード・ワールド・クラシック版に添えられた「序文」によれば、ヘンリーは、1878年の夏に、父親から直接、自分に託された原稿や手紙のことを聞いていた。そして、トロロープの死後、指示に従って細かい訂正や説明を付け加える以外、大幅な変更を施すことなくこの『自伝』を出版したという (*Autobiography*, xxi-xxii)。ヘンリーに明確な指示を残していたこと、そして1878年の秋に彼自身原稿に改訂を加えていることから推察できるように (*Terry, Oxford Reader's Companion*, 23)、トロロープは『自伝』に関して、細部に至るまでこだわりを持っていた。実際、彼は何を書き、何を書かないかを注意深く選んでいた<sup>4</sup>。また、読者に与える影響を意識して、いかに語るかという点についても十分考慮していたと思われる。

トロロープが語る彼の人生は、一言で言えば、苦労や努力が安定した幸福に結実する典型的な

ヴィクトリア朝の「サクセス・ストーリー」である (Terry, *The Artist in Hiding*, 13)。たとえば『自伝』の前半は、貧困のためパブリック・スクールで学友たちに仲間外れにされた悲惨な少年時代や、勤務先の郵便局で上司から「無能」扱いされ、屈辱を味わった青年時代が語られる。しかし、1841年に郵便局の監督補佐官としてアイルランドに赴任した時から彼の人生は好転し始める。職場では仕事ぶりが高く評価され、経済的な安定を得た。プライベートな面では、キツネ狩りなど生涯続く楽しみを見つけた。人生の伴侶を得て、子供にも恵まれ、穏やかな幸せを手に入れた。そして、小説家としてのスタート。1847年、1848年に発表したアイルランド小説、『バリクローランのマクダーモット家』(*The Macdermots of Ballycloran*)と『ケリー家とオケリー家』(*The Kellys and the O'Kellys*)はあまり売れなかったものの、その後、イングランドの大聖堂の町を舞台にした『慈善院長』(*The Warden*, 1855年)と『バーチェスターの塔』(*Barchester Towers*, 1857年)が評判となり、続く『ソーン医師』(*Doctor Thorne*, 1858年)や『フラムリー牧師館』(*Framley Parsonage*, 1861年)などの成功によって、作家としての名声を確立した。ある意味で、『自伝』に描かれた人生は、小説家トロロープが書いた唯一のビルドゥングス・ロマンとも言えるかもしれない。

実際、『自伝』において、トロロープは「サクセス・ストーリー」という筋書きに従って、自分の子供時代の惨めさを強調し、その後小説家として徐々に上昇していく人生を際立たせているのではないかという見方もある。たとえば、グレンディニングは、学校時代に友人が一人もいなかったとトロロープが書いているのは誇張であると指摘している (17)。R.H. スーパーも、トロロープがハロー校では学業で賞を一つももらったことがないと言っているのは誤りであると示唆している (76)。

また、トロロープはかなり意識的に、両親や妻など家族について詳述するのを控えているように見える。とりわけ、母親フランシスに関してそれが認められる。トロロープは、フランシスの長所 (社交性や、小説の執筆で一家を支えた強さ) と短所 (洞察力の欠如、小説における誇張の多さなど) を冷静に分析しているが、幼い時分から母親に顧みられなかったことについては、自分の気持ちをほとんど記していない。たとえば、『自伝』の第一章で、1827年にフランシスがトロロープの二番目の兄ヘンリーと二人の妹を連れてアメリカに渡ったこと、しばらくして父と長兄トマスもこれに加わったことが書かれている。つまり、トロロープだけイギリスに残されたわけだが、彼はこの間のつらい学校生活について語る一方、いわば置き去りにされた悲しみや怒りについては触れていない<sup>5</sup>。また、レナード・シェンゴールドも述べているように、フランシスは、1834年、35年にヘンリーと夫が相次いでベルギーで亡くなった時、トマスと娘のシシリアを葬儀に参列するようイギリスから呼び寄せたが、トロロープは呼ばなかった (93)<sup>6</sup>。『自伝』にはこのことにも言及がない。

妻のローズに関して言えば、トロロープはさらに寡黙である。『自伝』の4章でトロロープは、彼女と結婚した日のことを人生のよりよい始まりとなる「幸福な日」と書いているが、「私の結婚はほかの人の結婚と同じで、私と妻以外の人には取り立てて面白いものではない」(71)と言うにとどめ、ローズの人柄や二人の結婚生活について踏み込んだ話をするのを避けている。ただし、トロロープとローズが仲のよい夫婦だったであろうことは、他の箇所でもトロロープが、出版前に自分の本を読むのは妻だけであると言っていることから想像できる。また、トロロープが、『バーチェスターの塔』に関して、彼が鉛筆で書いた原稿をローズが清書したと言っていることも、二人の強い絆を示唆している。

このようにトロロープが家族について多くを語らないのはなぜか。デイヴィッド・スキルトン

らの批評家が、この点にディケンズの伝記の影響を見ているのは興味深い。トロローブがジョン・フォースターによる『チャールズ・ディケンズの生涯』<sup>7</sup>を読んだことは、彼の書簡に認められる。1872年に2月27日、トロローブは、ジョージ・エリオットとG.H.ルイスに宛てた手紙の中で、フォースターの伝記の第一巻に触れ、その内容について不快感を露わにしている。とりわけ、ディケンズが両親に対して抱いていた怒りや否定的感情をフォースターが公にしたことを、ディケンズの名を汚すものだと非難しているのである（*Letters* II, 557）。こうした角度から考えると、スキルトンが示唆するように、『自伝』にフランシスやローズなど家族に関する記述が少ないのは、フォースターの伝記に対する批判と解釈できるかもしれない（85）。つまり、トロローブはスキャンダラスな要素や色々な憶測を生む恐れのある記述はあらかじめ排除し、家庭のプライバシーを守ろうとしたのではないだろうか。ちなみに、トロローブの書簡集を編集したジョン・ホールも、フォースターの伝記に対する反発が、トロローブが『自伝』を書く動機づけとなったと推察している（*Letters* II, 671）。

それにしても、「自伝」という形式をとりながら、私生活についてあまり語らないという点は興味深い。はたして、トロローブは何に重きを置いて『自伝』を書いたのか。彼が書きたかった「自伝」とは、一体どういうものだったのか。こうした問題を考えるにあたって、あらためて『自伝』の全体の構成を見てみよう。既に示唆したように1章から3章は、トロローブの孤独な少年時代とアイルランドへ赴任する前の多難な青年時代について書かれている。それから、4章（「アイルランド—最初の二つの小説1841～48年」）及び5章（「初めての成功1849～1855年」）あたりから人生が上り坂に差し掛かり、小説家としての地位が確立していく様子が描かれる。そして、それに伴い、トロローブは最もプライベートな部分—自分の家族や内面生活—について次第に語らなくなる。むしろ、小説とは何か、小説家の務めとは何か、小説家として成功するのに重要なことは何かといった問題に話題を転じているのである。たとえば、12～14章には、それぞれ「小説と小説を書く技術について」、「現代のイギリスの小説家について」、「批評について」というタイトルがつけられている。トロローブが自ら示唆しているように、この3つの章は彼が1866年に構想したが、挫折に終わった文学批評—「イギリス散文小説の歴史」（‘History of English Prose Fiction’）—が基になっている（Machann, 75）。これらの章でトロローブは小説家のあるべき姿として、「人間性」について知識を持ち、自分が創りだすキャラクターと「共に生活すること」<sup>8</sup>、読者を喜ばせ、かつ「教訓を教えること」等を強調し、さらには、小説家と批評家の間にいわゆる馴れ合いや不誠実な交渉があってはならないと主張している。最初の2点について言えば、小説において「人間性」を何よりも重視し、プロットよりもキャラクターを重視するトロローブの姿勢、そして、小説家はエンターテイナーであると同時に「説教師」でもあるという彼の基本的な考えを反映している。最後の点については、トロローブはディケンズの『我ら共通の友』（*Our Mutual Friend*, 1865年）を称賛する論評を書いた批評家が、作者から感謝のしるしとして、その本の手書き原稿を贈られたというエピソードに触れ、不適切な関係として批判している<sup>9</sup>。

そして、『自伝』の後半以降、トロローブは「職業」としての小説家についてさらに自説を展開していく。たとえば、彼は自身の執筆の習慣を披露し、「作家志望の若者」に向けたアドバイスという形で、小説家には地道に努力し続ける姿勢が不可欠であると主張する。トロローブは計画的に物事を行う几帳面な性格であったようだ。18章でも、雑誌に寄稿する原稿は一日でも締め切りに遅れたことはなく、また、約束した量より原稿が少なかったり多かったりしたことはないと自ら述べている（327）。実際、新しい本に取りかかるときは、進行予定表のようなものを作り、週ごとに区切った日記を用意して、毎日書いたページ数を記録した。1週に割り当てたページ数

の平均は40であったが、少ない時は20ページ、多い時は112ページにまで及ぶこともあった（118-19）。ちなみに、1ページには250語入れるようにしており、時計を目の前に置いて15分間で250語書くよう自分に課した（272）。このやり方で、トロローブは毎朝郵便局に出勤する前の3時間、執筆に専念した。日曜日や旅行中も休まず書いた。トロローブが残したたくさんの作品—47の小説、43の短編、その他旅行記や評伝、数々のエッセイ等—は、このような規則的な創作活動の産物である。彼は、小説家はインスピレーションがひらめくまで創作ができないという考えを否定し、小説家に必要なものは、むしろ、靴職人の場合と同様、勤勉な習慣であると訴える。

私がするような仕事では、自分も、職人や機械工と同じような労働の規則に縛られていると思いこむことが成功の秘訣だとずっと信じてきた。靴職人は靴を一足仕上げて、腰を下ろしてその靴をぼうっと悦に入って眺めているようなことはない。「ついに一足完成させたぞ！なんて見事な靴なんだ！」靴職人がこのような気分に入っていたら、一生の半分は給料にありつけないだろう。それはプロの作家でも同じことだ。（323）

トロローブ自身、多くの仕事をするに達成感と誇りを感じていたのであろう。『自伝』の随所で、己を律し、コツコツと努力を重ねることの意義を繰り返し説いている。「忠実に守らなければならない規則くらい強力なものはない。石を穿つ水滴のような力があるのだ。日々の小さな仕事だって、本当に毎日続けるのなら、やったりやらなかったりでむらがあるヘラクレスの仕事を打ち負かす。野ウサギを追ひ抜くのはいつだってカメなのだ」（120）。

トロローブが生きたヴィクトリア朝時代は小説の全盛期であった。ジョン・サザランドの推定によれば、1837年から1901年には約7千人の小説家がおり、6万もの小説が出版された（1）。また、作家を志す者も多く、そうした人々に向けた「小説家になるための手引書」の類も多数あったという（Skilton, 86）<sup>10</sup>。スキルトンは、トロローブの『自伝』もこのような「手引書」のカテゴリーに入ると捉えている（86）。既に述べた通り、『自伝』には、子供時代に関するトロローブの回想に誇張と思われる部分がある。そして、時計を前に15分間で250語書くという彼の執筆の習慣等についても、誇張であり、額面通りに受けとることはできないと言う批評家もいる（Super, 79）。しかしながら、そういった箇所にも、小説家として成功した自身の体験を若者に伝えたい、作家志望の読者を鼓舞したいというトロローブの気持ちを見ることができるのではないか。この意味で彼の姿勢は基本的に誠実であったと思われる。

トロローブが『自伝』を書いた時期は、彼の小説家としての人気に翳りが見え始めていた。1875～76年に発表した『首相』（*The Prime Minister*）は全般に不評であった（Smalley, 417-27）。また、私生活においても60年代後半頃から苦い経験や悲しい出来事が続いた。1867年には次長の職を逸したため、郵便局を辞職し、その翌年には国会議員になるべく、ヨークシャーの選挙区から出馬するも惨敗した。また、次男フレデリックのオーストラリア移住にも心を痛めた。そうした状況を考えると、テリーが論じているように、トロローブは『自伝』の執筆にあたって、人生を振り返り、自分が成し遂げたもの—小説家としての成功—をあらためて確認したかったのかもしれない（*The Artist in Hiding*, 39）。この意味で、『自伝』にトロローブが付したリスト—各々の作品から彼が受け取った金額の記録—は、彼の人生の「集約」だというマカンの言葉にも納得がいく（73）。「労働においては、たゆみない努力があらゆる困難に打ち勝つ。『雨だれ石を穿つ』<sup>11</sup>」（*Autobiography*, 365）。

トロローブは子供時代から、人気者になりたい、人に認められたいという気持ちが人一倍強か

ったようである。「確かにいつも私は名声の魅力にとらわれていた……ひとかどの人物として認められること—ひとかどの人物とまではいかなくても、アンソニー・トロロープになること—これが私にとっては大事だった」(107)。こうした願望が実現したという意味で、『自伝』はハッピーエンドで幕が下りる。不断の努力で自ら成功をつかんだ作家—これはトロロープが世間にも抱いてほしいと考えていたセルフ・イメージであった。『自伝』はそれをプロデュースする、極めて戦略的な書といえる。

## 注

1. 『自伝』が発表された当時の批評家の反応については、Nicholas Shrimpton, 'Introduction,' *An Autobiography and Other Writings*. By Anthony Trollope. pp.vii-viii を参照。
2. N. John Hall, 'Seeing Trollope's *An Autobiography* through the Press,' p.222.
3. ウォルポールは、『自伝』はトロロープの研究の「礎」とであると述べている。Hugh Walpole, *Anthony Trollope*, p.1.
4. この点については、2015年4月23日にトロロープの生誕200年を祝うイベントとして、ロンドンの大英図書館でパネルディスカッション（'A Celebration of Anthony Trollope'）が行われた際のヴィクトリア・グレンディニングの発言が参考になった。
5. エルシー・ミッチーを含む多くの批評家がこの点を指摘している。“‘The Clever Son of a Clever Mother’: Anthony and Frances Trollope,” pp.280–81.
6. レナード・シェンゴールドは、トロロープと母親との関係を精神分析的観点から論じている。*Is There Life Without Mother?: Psychoanalysis, Biography, Creativity* を参照。
7. フォースターの *The Life of Charles Dickens* は三巻からなる伝記で、1872～74年に出版された。
8. この点において、トロロープはサッカレーを同時代の作家の中で最も高く評価していた。
9. 『自伝』にはディケンズを意識している箇所が少なくない。たとえば、13章で、トロロープはディケンズを「同時代で一番人気がある小説家」として、その独創性を高く評価する一方で、彼が描くキャラクターは「人間」というよりも「人形」（'puppets'）である等、かなり批判的なコメントもしている。
10. スキルトンは、ウォルター・ベサントの *The Art of Fiction*（1884年）やジェームズ・ペインの 'The Literary Calling and Its Future'（1879年）等をこういった「手引書」の例として挙げている。
11. 原文ではラテン語で引用されている。

## 引用文献

- Glendinning, Victoria. 'Trollope as Autobiographer and Biographer.' *The Cambridge Companion to Anthony Trollope*. Ed. Carolyn Dever and Lisa Niles. Cambridge: Cambridge UP, 2011. 17–30.
- Hall, N. John. 'Seeing Trollope's *An Autobiography* through the Press: The Correspondence of William Blackwood and Henry Merivale Trollope.' *The Princeton University Library Chronicle*, Vol.47. No.2(Winter 1986): 189–223.
- Machann, Clinton. *The Genre of Autobiography in Victorian Literature*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1994.
- Michie, Elsie. "‘The Clever Son of a Clever Mother’: Anthony and Frances Trollope." *The Routledge Research Companion to Anthony Trollope*. Ed. Deborah Denenholz Morse, Margaret Markwick, and Mark W. Turner. Abingdon: Routledge, 2017. 274–284.
- Shengold, Leonard. *Is There Life Without Mother?: Psychoanalysis, Biography, Creativity*. NY: Routledge, 2015.
- Shrimpton, Nicholas. Introduction. *An Autobiography and Other Writings*. By Anthony Trollope. Oxford: Ox-

- ford UP, 2016. vii–xx.
- Skilton, David. 'Reading *An Autobiography* As Advice Literature.' *The Edinburgh Companion to Anthony Trollope*. Ed. Frederik Van Dam, David Skilton and Ortwin de Graef. Edinburgh: Edinburgh UP, 2019. 79–90.
- Smalley, Donald, ed. *Trollope: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1966.
- Super, R. H. 'Truth and Fiction in Trollope's *Autobiography*.' *Nineteenth-Century Fiction* 48.1 (1993): 74–88.
- Sutherland, John. *The Longman Companion to Victorian Fiction*. Harlow: Longman, 1988.
- Terry, R. C., ed. *Oxford Reader's Companion to Trollope*. Oxford: OUP, 1999.
- . *The Artist in Hiding*. London: Macmillan, 1977.
- Trollope, Anthony. *An Autobiography*. Oxford: OUP, 1989.
- . *The Letters of Anthony Trollope*. Ed. N. John Hall. Vol. II. 1871–1882. Stanford, California: Stanford UP, 1983.
- Walpole, Hugh. *Anthony Trollope*. London: Macmillan, 1928.